

営農情報

第114号 平成24年1月5日発行

(イチゴ)

J A 福岡大城

南筑後普及指導センター

11月が高温で推移したことから、1番果房の収穫が前進化しています。早期作型では、ほぼ収穫終了、普通作型で4~5果収穫程度となっています。

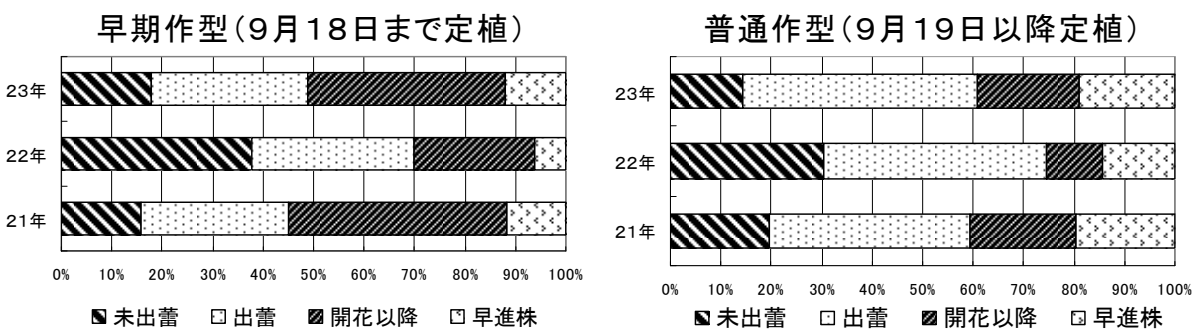
12月10~15日の調査(下図)による2番果房の状況として、早期作型ではばらつきが多くみられ、早いもので着果~緑熟期、遅いもので未出蕾~出蕾、普通ポットでは出蕾~開花程度となっています。このことから2番果房の収穫は1月中旬頃から見込まれます。

また、早進株の発生が昨年に比べ多くみられ、一部で多芽(写真)の発生もみられます。

病害虫については、うどんこ病が多発しており、ハダニ、アブラムシの発生が一部でみられます。



多芽



年度別2番果房出蕾状況

1月は、外気温の低下や日照時間が短いため、株が弱りやすくなります。適切な温度管理と電照時間の調整により草勢を維持し、2番果房の肥大促進と3番果房の早期出蕾を促しましょう。

かん水・肥培管理

○乾燥しすぎると果実の肥大不足や3番果房の出蕾遅れとなる。定期的な少量多回数かん水に心がける。(マルチの上から土を押す等で、適湿を把握する。pFメーターを設置している場合は、pF値1.7~1.8[灰色カビなどの多湿性病害が発生している場合は2.0~2.3]で管理する。)

○液肥は、株が弱らないよう定期的に施用し、1か月当たり窒素成分で2 kg/10 a（窒素成分10%の液肥10%で1 kg）を3～4回に分け施用する。

1番と2番が離れた場合は、1番果房終了～2番果房着色期まで追肥しない。

温度管理

○2番果房の収穫開始までは、昼温を高温管理とし、心葉の展開や果房生育を促進する。

【果房の生育状況別温度管理の目安】

	昼間	夜間	備考
1番果房収穫期間	20～24℃	5～7℃	収穫中は品質向上に低めの温度管理
1番果房収穫終了から 2番果房収穫開始まで	24～26℃	5～7℃	2番果房の生育促進と、3番果房の出蕾を促すため高めの管理

電照時間の調整

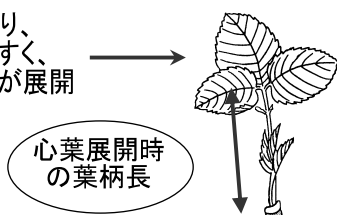
○電照は、株がわい化しないよう適切な草勢を維持し、3番果房までの連続的な出蕾による収量増加を目的に行う。

○2番果房の出蕾が遅れ、1番果房の収穫終了頃に出蕾している場合は、開花後電照時間を少し短くし、株の立ち上がりを抑える。栄養生長に傾いた状態では、玉の肥大が悪くなる。

○電照時間は、根の張り・着果負担の状況・天候・地力により異なるため、常に草勢（特に心葉の展開状況）を観察し、その後の生育を予想して30分～6時間で調整する。立ち上がり過ぎているようでも、厳寒期は電照を完全に切らない。

【心葉展開時の葉柄長の測定】

心葉は外葉より、葉色がややうすく、つやのある葉が展開



わい化状態の心葉

【心葉展開時の葉柄長と電照時間調整】

心葉展開時の葉柄長	8 cm以下	9～10 cm程度	12 cm以上
電照時間	時間を長く	現状維持	時間を短く

芽の整理

2番果房出蕾以降の芽数は4～5芽までとし、「どろ芽やわき芽」の除去を行う。

果梗・古葉の除去および摘果

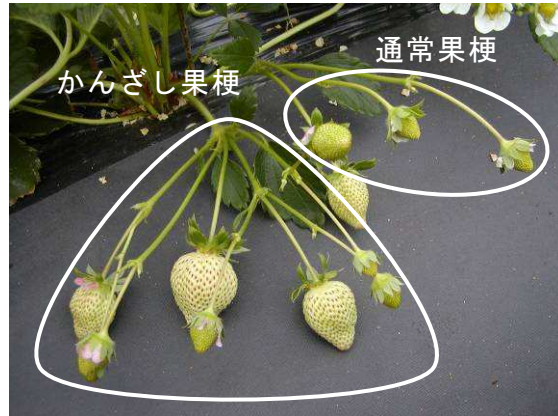
○収穫が終了した1番果房の果梗は、3番果房の出蕾を促進するため、早めに除去する。同時に、枯れ葉や黄化したなど不要になった下葉の除去を行う。

○2番果房の着果数制限は、3番果房への連続的な収穫を図るために行う。

【1枝あたりの着果数の目安】

通常果梗:3～5果/枝

かんざし果梗:6～8果/枝



病害虫防除

○うどんこ病

薬剤により定期的に予防防除を行う。発病を認めた場合には、病葉や病果を速やかにハウス外に持ち出し、5～7日おきに集中防除を行う。スーパースモーキーなどの電気加熱式くん煙器を2～4時間程度使用することも有効（ただし、イオウくん煙後、炭酸ガス発生装置の稼働までに4時間以上あける）。

○ハダニ類

低温期は活動が衰える。この時期に抑えておかないと2月以降に急増するので防除を徹底する。1番果房の果梗および下葉の除去後に、薬剤防除を行う。

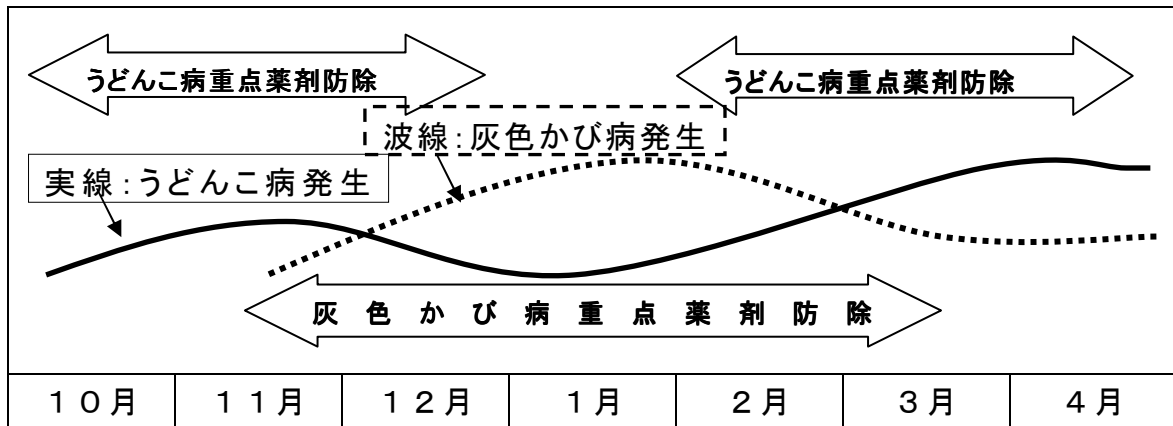
○灰色かび病

空気湿度の高い日が続いた場合に発病が増える（特に谷下など）ため、曇天降雨日が続く場合は、日中はハウス内の除湿（換気等）を徹底し、夜間は暖房機が稼働するよう温度設定する。

ハウス内が多湿にならないように多量かん水をさけ、換気に努めるとともに、発病を認めた場合には、罹病葉や罹病果を速やかにハウス外に持ち出す。

○菌核病

ハウス内や通路が過湿にならないように管理する。発生したら、被害葉を除去し、株元のマルチを破って広げ、株元を乾燥させる。



秋ランナーの親株利用について

11～12月にかけて、炭そ病による枯死株が散見される。炭そ病発生の恐れのある株は次年度の親株として使用しない。その場合、ビニル被覆後に発生した秋ランナーを親株として利用する。

注意

秋ランナーは通常の親株（夏越し株）に比べ、子苗の発生が少ない（遅い）傾向にあるため、苗の本数を多めに準備する（本田10a 当たり、親株1000株を確保する）。

農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう!